大山　深田久弥

伝説的に言えば、大山はわが国で最も古い山の一つである。昔、出雲にいた神様が、あまり自分の国が小さいので諸国の余った土地を縫い足そうとして、国来国来と綱で引き寄せた。その引綱の杭が火神「今の大山」であると『出雲風土記』が伝えている。

スサノオノ命や大国主命の神話によって出雲は古い国とされている。独自の古代文化の発祥地という説に疑いはあるにしても、いにしえから大山は高くそびえ、人々がそれを仰ぎ尊んできたことに間違いはない。海へ出た時の目標にもなったであろうし、遠く旅する人の指標にもなっただろう。

太古の民は山そのものを神とあがめたが、歴とした国史に現れたかぎりでも、大山神は仁明天皇承和四年　八三七」二月従五位下に叙任されている。

だいたい中国地方には目立った山が少ない。その中でひとり大山が図抜けて高く、秀麗な容を持っている。私がその頂上に立った日は、澄み渡った秋晴れで、山陰・山陽の脊梁をなす山々はもちろん、山に詳しい同行の地元の人が、あれは四国の山ではないかと訝ったほど遠くまで見えた。

中国地方は山岳の陵夷運動が発達したのか、高い山がないのみならず、顕著な峰も少ない。たいてい似たような形である。個性的なのは、大山と島根県の三瓶山、この二つの火山だけである。山陰・山陽へ名山探しに行った私は、結局この地方では大山一つしか推し得なかった。しかしこの一つは誇るべき一つであった。大山をダイセンと読むのは、氷ノ山・扇の

山のように、山陰ではたいてい山をセンと呼んでいて、峠を乢と呼ぶのが多いのと同様、この地方独自の呼称である。伯耆の国にありながら出雲富士という名もあるのは、この山が整った富士型に見えるのは、出雲から望んだ場合に限るからであろう。私は大山を、松江の城から、出雲大社から、三瓶山の頂から、望んだ。いつも一と目でわかる、秀でた円錐形で立っていた。

しかし何々富士ならどこにでもある。大山がそれ以上に私を感歎させたのは、その頂上のみごとな崩壊ぶりであった。東西に長い頂稜は、剃刀の刃のように鋭くなって南面・北面へなだれ落ちている。まるで両面から大山を切り崩しにかかっているふうに見える。

その北壁が夕陽に染められた時の美しさは、古陶の肌を見るかのようであった。南壁は晴れた朝の陽で見た。脆い崩壊の一つ一つがクッキリした影を持ち、その上に尖ったピークが突っ立っている。これも美しい眺めだった。

大山寺はその北壁の下にある。大山を人文的に有名にしたのはこの寺であった。奈良時代、諸国の顕著な高山が山伏修験遣によって開かれた頃、創建されたのであろう。開基についての伝説はいくつかあって、西行法師の『撰集抄』によれば、養老年間　七一七～七二四年」、玉造の俊方という武士が大山に持して鹿を射たところ、その矢のあたったのは自分の尊崇している地蔵であった。そこで深く後悔して、発心して堂宇を建てたという。

その後大山寺は僧兵を擁して、武力と権力の一大勢力亡なった。幾多の変遷を経て江戸時代には三千石の寺領を受け、治外法権の天領となり、寺内に四十二坊あったという。今もその名残が崩れた石垣や古びた石畳にしのばれ、昔の繁栄の跡が草木の茂るに任されているのも感慨深い。

明治維新の廃仏毀釈まではここも神仏混淆で、現在の大神山神社の奥宮は、大智明権現の本殿であった。そこへ至る長い石畳道にも、古い昔の香が残っている。

その僧坊の一つ蓬浄院に志賀直哉氏が滞留されたことがあって、『暗夜行路』の終わりに、主人公の時任謙作（ときとうけんさく）が大山に登ろうとして、途中で疲れてやめ、不思議な陶酔感を感じたことが出ている。そこから見おろした暁（あ）け方の描写があるが、地に落とした大山の影が次第に縮まってくる有様が巧みに書かれている。そして中国一の高山で、輪郭に張切った強い線を持つ北山の影を、その儘（まま）、平地に眺められるのを稀有（けう）の事とし、それから謙作は或る感動を受けた」。

頂上から南の展望は、打ち重なる山なみばかりだが、日本海側は見るものが多すぎた。すぐ眼下の風景は『暗夜行路』にも細かに描かれているが、海と陸の交錯した美しい繊細な眺めであった。海の彼方には、隠岐の島がハッキリ見えた。それは一つの島でなく、群島の形で見えた。東の方には、扇ノ山、氷ノ山らしい連嶺（れんれい）が望まれ、西方には遠く、三つの瓶（かめ）を伏せて並べたような三瓶山が一と目でそれとわかった。

『回本百名山「１９６４年新潮社刊」』

の朝日文庫版から再録　大山